

書評

園部英夫 著

北欧Ⅱ 幸せのものさし

障害者権利条約のいきる町で

丸山啓史



本書は、全国障害者問題研究会（全障研）の月刊誌『みんなのねがい』において2014年度に連載された内容がもとになっている。「北欧 考える旅―福祉・教育・障害者・人生」（全障研出版部・2009年）の続編といつてよい。

魅力の一つは、たぐさんの写真とともに、固有名詞をともしなうかたちで、人々の生活や学校の様子が描かれていることである。20年間にわたる10回以上の北欧訪問をもとに、本書はまとめられている。政策文書や統計からはみえてこない、いきいきとした現場の姿に触れることができる。また、もう一つの魅力は、日本における障害児者の現状に対する問題意識が背景にあることである。著者は、およそ30年にわたり全障研の全国事

まりがけの旅行が企画されることもある。利用者委員会が組織されていて、「ビールを何本飲んでいいか」など、ルールはみんなで決めていくそうだ。運営費は、自治体から出ている。このような場合は、日本においても広がっていくことが望まれよう。

三つ目は、触法行為のあった障害者が生活する施設である。高い塀などない場所、仕事として牛・羊・鶏の飼育や野菜の栽培がされている。居住者の部屋に職員が無理に入るのは認められないという。暮らす人たちの満足感や喜びが大切にされており、服役者は「安心感で人はだいたい落ち着きますね」と語る。単なる懲罰ではない関わり方がされていることに、目を向ける必要があるだろう。

これをとつても、障害児者の教育や社会福祉だけの問題ではないように思える。北欧の社会において形成されてきた文化や、人間に保障されるべきことについての人々の共通理解が、基盤にあるのだろう。日本でいえば憲法25条が定める「健康で文化的な最低限度の生活」の水準、その水準についての社会的合意が高

務局長を務めてきており、障害者の権利保障運動を中心的に担っている。本書は、単に北欧事情を紹介するだけのものではない。

本書の副題にある障害者権利条約も、北欧と日本をつなぐものといえる。権利条約は、2006年に国連総会で採択され、日本も2014年に批准したものである。国際的な努力が生んだ権利条約を、北欧と日本は共有している。その権利条約の条文が、本書においてはたびたび挿入される。権利条約を権利保障の指針にしたいという著者の強い思いが表れているといえよう。

障害者権利条約は、日本語がどれだけ丁寧なされたとしても、条文が書き並べられるだけでは十分な力を発揮しないところにあるような印象を受ける。北欧の社会のあり方を日本で再現することはできないのだから、北欧の取り組みから私たちは多くを学ぶことができる。

もちろん、北欧を理想社会としてみる必要はないし、みることもできない。たとえば、デンマーク政府は2003年からのイラク戦争に軍隊を送り、2014年からのイラク空爆にも加わってきた（他の北欧諸国とともに、アフガニスタンにおける国際治安支援部隊にも参加してきた）。そのことは厳しく糾弾されなければならぬ。また、障害児者の教育や社会福祉に関わっても、「それでよいのか？」と疑問を抱くところは、本書のなかにもある。しかし、北欧において実現している学びや暮らしのなかには、私たちが目指すべきものの原型を見つけることができる。

うらやましくなるような生活の実例を知ること、望ましい社会のあり方を思い描くことは、わくわくする楽しいことである反面、つらいこともある。それは、自分たちの惨めさを直視することだからだ。安心できる経済的保障を得られ

い。条文に込められた意味が人々に咀嚼され、条文に見合う生活と社会のあり方が具体的に思い描かれるときに、権利条約は権利保障の支えとなるのではないだろうか。その意味で、北欧の実際の生活と権利条約とが並べて示される本書には、大きな意義がある。目録を豊かにもつことを助けてくれるのである。

そうした目標像に関わって、私にとつては、デンマークの三つの場が特に興味深かった。

一つ目は、寄宿制の成人教育機関、フォルケホイスコーレである。学生の半数が障害者だというフォルケホイスコーレのことが記されており、陽のあたる屋外での太鼓、温水プールでの水泳、体育の授業などが、写真で紹介されている。教育といえは子どもの学校教育という認識が日本では強いなか、成人の教育・学習の場の存在は注目すべきものである。

二つ目は、余暇活動の場である。子ども・若者に年齢に応じたクラブが用意されているだけでなく、障害のある成人のための余暇センターが存在している。平日の夜に活動が展開されているほか、泊

ない現実、心地よくない労働に人生の多くの部分を奪われる現実、家族に依存しなければ学びや暮らしが成り立ちにくい現実、多彩な文化活動や生涯学習には縁遠い現実……。それとは異なる生活があることを知れば、それが実現されないでいる現状の悲しさを痛感せざるを得ない。

それでも、目指すべき理想を描き、語ることが大切なのだと思う。政治状況が厳しいなかでは、権利保障のための運動も、政策の問題点の追及に傾きやすい。もちろん政策批判は極めて重要なのだが、同時に、私たちが目指すところを可能な限り鮮明にすることが強く求められるのではないだろうか。北欧について知ることには、そのための手がかりを得る一つの方法である。

弱い立場に置かれがちな障害児者の生活を通して、みえてくるものがある。障害者問題に深く関わる人だけでなく、「幸せのものさし」を考えたいと思うすべての人にとって、本書は価値がある。

（全国障害者問題研究会出版部・定価「本体1700円＋税」）
（まるやま けいし・京都教育大学准教授）